『訓蒙図彙』寛文版本と『本草綱目』――「狒狒」をめぐって――
The Kanbun Version of *Kinmozui* and *Bencaogangmu*: Focusing on the Baboon

楊 世瑾
YANG Shijin

摘要

百科事典《训蒙图彙》收录了包括天文、地理、居所、人物、器物、动植物等在内的大量插图。本文以狒狒为例，来分析《训蒙图彙》如何将《本草纲目》的本文图像化，使得教养得以普及。

キーワード：訓蒙図彙　本草綱目　本文　図像化

目次

一、『訓蒙図彙』寛文版本の図像――「凡例」から
一、『訓蒙図彙』版本と『本草綱目』図像の二系統
三、『訓蒙図彙』寛文版本「狒狒」の図像と『本草綱目』
四、『訓蒙図彙』寛文版本「狒狒」の本文と『本草綱目』
むすび

一、『訓蒙図彙』寛文版本の図像――「凡例」から

寛文六年（一六六六）刊、中村惕斎（寛永六〈一六二九〉～元禄十五〈一七〇二〉）撰『訓蒙図彙』二〇巻は、日本最初の絵入り百科事典であり、[1]「天文」以下十七部から成り、一四八四項目を収録し、各項目にそれぞれ一図を配して短い解説を付す。ただし、解説を付けない場合もある。

『訓蒙図彙』の初版❶[2]寛文版本の図像は、どのようにして成立したのであろうか。

『訓蒙図彙』「凡例」は諸本によって若干の異同があるが、❶寛文版本の「凡例」は、図像について次のように述べている。

諸ー品ノ形ー状、並ニ象二茲一邦ノ風ー俗土ー産ニ一矣。凡所ノ二目ー撃スル一者ハ、便筆シテ而摹スレ之ヲ。或ハ拠リ二画ー家ノ之所ニレ写、或ハ審ニ問ヒ二識ー者ニ一、然シテ後命シテレ工ニ描二ー成ス之ヲ一。其間ニ、有トキハ二本ー土ノ所レ無キ及ヒ有無未ルコト一レ審ニセ、則並ニ以二異ー邦ノ風ー物ヲ一補レ之ヲ。[3]

（諸品の形状、並に茲の邦の風俗土産に象る。凡そ目撃する所の者は、便ち筆して之を摹す。或いは画家の写す所に拠り、或いは審かに識る者に問ひ、然して後に工に命じて之を描成す。其の間に、本土の無き所及び有無未だ審かにせざること有るときは、則ち並に異邦の風物を以て之を補ふ。）

これによれば、❶寛文版本の図像は、基本的には惕斎自身が直接見聞したものを写したものであり、このほか、画家の写した絵に依拠したり、識者に尋ねたことを画工に描かせたものである。さらに、日本本土にないものや有無が明らかでないものは、主に中国等の「異邦の風物」によって補ったという。

これら❶寛文版本の図像は、どのような典籍に依拠したのであろうか。

『訓蒙図彙』❶寛文版本「凡例」は、引用書目について次のように述べている。

引ー證ノ之図ー書、漢ー字ハ以二三ー才ー図ー会農ー政ー全ー書及ヒ諸ー家ノ本ー草ノ之図ー説ヲ一為レ主ト、凡訓ー詁注ー疏稗ー史雑ー編ノ中、有トキハ二明ー徴一、則採ー摭シテ以裨ー益ス矣。国ー書ハ、以二源ー氏カ和ー名ー集ヲ一為シレ本ト、以二林ー氏カ多ー識ー編ヲ一継レ之ニ。凡類ー編、雑ー抄如キ二字ー鏡塩ー嚢下ー学節ー用ノ之等ノ一、並ニ参ヘレ之ニ補レ之ヲ。

（引證の図書、漢字は『三才図会』『農政全書』及び諸家の本草の図説を以て主と為し、凡そ訓詁・注疏・稗史・雑編の中、明徴有るときは、則ち採摭して以て裨益す。国書は、源氏が『和名集』を以て本と為し、林氏が『多識編』を以て之に継ぐ。凡そ類編、雑抄は『字鏡』『塩嚢』『下学』『節用』等の如き、並びに之に参へ、之を補ふ。）

「凡例」で中村惕斎が自らあげた漢籍・和書の引用書目は、次のとおりである。

漢籍：『三才図会』・『農政全書』・「諸家の本草の図説」

和書：源氏『和名集［抄］』・林氏『多識編』・『字鏡［集］』『塩［ママ］［塩］嚢［鈔］』『下学［集］』『節用［集］』

『訓蒙図彙』が引用する漢籍のうち、図像を載せるものは、次の二書であり、

明・万暦三七年（一六〇九）刊、王圻・王思義撰『三才図会』一〇六巻

明・崇禎十二年（一六三九）刊、徐光啓撰『農政全書』六〇巻

このほかに「諸家の本草の図説」がある。

『三才図会』の図像が『訓蒙図彙』に与えた影響については、杉本つとむ氏、勝又基氏の指摘がある。[4]「諸家の本草の図説」は特定されない種々の本草書をさすとみられるが、勝又氏が、明・万暦二四年（一五九六）刊、李時珍撰『本草綱目』の図像の影響を指摘されている。[5] また、海野一隆氏は「凡例」に掲出されない正保二年（一六四五）刊、『万国総図・万国人物図』の人物図が、『訓蒙図彙』の人物図に影響を与えたことを論じられた。[6]

本稿は、『三才図会』にも『農政全書』にも収録されていない「彿彿」の図像をとりあげ、『訓蒙図彙』❶寛文版本と『本草綱目』の図像を比較検討し、『訓蒙図彙』❶寛文版本が、『本草綱目』の本文に記述された内容をどのように図像化したのか、その手法を考察する。

二、『訓蒙図彙』版本と『本草綱目』図像の二系統

『訓蒙図彙』には、主に次の三種類の版本が伝存する。[7]

❶寛文六年（一六六六）刊、初版『訓蒙図彙』二〇巻

❷元禄八年（一六九五）刊、増補版『頭書増補訓蒙図彙』二一巻

❸寛政元年（一七八九）刊、増補版『頭書増補訓蒙図彙大成』二一巻

先述のように、初版である❶寛文版本には、各項目に一四八四の図像を収載する。このうち、十八の図像が、『本草綱目』の図像とほぼ一致することに注目したい。

明・李時珍撰『本草綱目』は十六部六〇類一八九二項目から成り、明代の版本が伝存する。その代表的なものは、次の三種である。[8]

明・万暦二四年（一五九六）刊、初版本「金陵本」

明・万暦三一年（一六〇三）刊、校訂本「江西本」

明・崇禎十三年（一六四〇）刊、校訂本「武林錢衙本」

杉本つとむ氏は、これらの三種の版本が、江戸初期に日本に舶来されたとし、[9] 渡邊幸三氏は日本伝来後の『本草綱目』和刻本の系統を整理された。渡邊氏の諸本研究によれば、『訓蒙図彙』初版❶寛文版本刊行の前後に、次の四種の『本草綱目』和刻本が版行されている。[10]

①寛永十四年（一六三七）『本草綱目』版本

②承応　二年（一六五三）『本草綱目』版本

③万治　二年（一六五九）『本草綱目』版本

❶寛文　六年（一六六六）『訓蒙図彙』刊行

④寛文　九年（一六六九）『本草綱目』版本

渡邊氏の『本草綱目』諸本研究によれば、明代の『本草綱目』初刊本「金陵本」と、これを継承した「江西本」の附図（図像）が粗拙であるのに対して、「武林錢衙本」の附図ははるかに写実的である。「武林錢衙本」は、錢蔚起が江西本を全訂し、特に『本草綱目』の図像を描き直し、これを上・中・下三巻に分けて改刻したものである。『本草綱目』最初の和刻本①寛永十四年版本の版木は、「江西本」系統の訓点本を祖本とする。②承応二年版本は、本文は①寛永版本の版木をそのまま用いたが、図像は①寛永版本のそれを廃し、写実的な「武林錢衙本」の図像に入れ替えている。③万治二年版本は、「武林錢衙本」を校訂加訓した重刻とされる。[11] ④寛文九年版本の図像は、③万治二年版本を継承したものとされる。[12]

渡邊氏の研究を踏まえて、別稿において、『本草綱目』和刻本①～④の図像と『訓蒙図彙』❶の図像のうち、両者に共通する十八の図像を抽出し、比較検討した結果、『訓蒙図彙』❶寛文版本成立前後の四種の和刻本の図像の典拠は、次のとおりであった。

①寛永十四年（一六三七）『本草綱目』版本：「江西本」系統の図像を採用

②承応　二年（一六五三）『本草綱目』版本：「武林錢衙本」の図像を採用
③万治　二年（一六五九）『本草綱目』版本：「武林錢衙本」の図像を採用
❶寛文　六年（一六六六）『訓蒙図彙』刊行
④寛文　九年（一六六九）『本草綱目』版本：「武林錢衙本」の図像を採用

これによって、『本草綱目』和刻本①～④の図像には、次の二つの系統A系統①・B系統②③④があることが確認された。

A系統：①寛永十四年版本の図像
B系統：②承応二年刊本の図像―③万治二年版本の図像―④寛文九年版

また、『訓蒙図彙』❶寛文版本の図像は、『本草綱目』和刻本B系統②③の図像を、直接参看してこれを踏襲していることが確認された[13]。

ただし、『訓蒙図彙』❶寛文版本の図像と『本草綱目』和刻本B系統の図像との関係は、単なる参看、踏襲にとどまらない可能性がある。そこで、本稿では『訓蒙図彙』❶寛文版本を取り上げ、巻十二「畜獣」に収載する「狒狒（ひひ）」の項を対象として、『訓蒙図彙』❶寛文版本と『本草綱目』和刻本本文と図像の関係を検討する。ただし、③万治二年版本が所在不明のため、確認することができなかった。したがって、本稿では、『訓蒙図彙』寛文版本の図像を、A系統①寛永十四年版本、B系統③万治二年版本、B系統④寛文九年版本との比較検討を行う。

三、『訓蒙図彙』寛文版本「狒狒」の図像と『本草綱目』

『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の図像は、『本草綱目』の影響をどのように受けて成立しているのであろうか。

ここでは、『訓蒙図彙』❶寛文版本の図像と『本草綱目』の本文を照らし合わせながら、A系統①・B系統②④の図像とを比較する[14]。

図A『訓蒙図彙』寛文版本❶
図B『本草綱目』A系統①「狒狒」
図C『本草綱目』B系統②「狒狒」
図D『本草綱目』B系統④「狒狒」

図A～Dから次のことが確認される。

第一に、「狒狒」の向きである。『訓蒙図彙』❶寛文版本は右向きであるのに対して、『本草綱目』A系統①、B系統②④はいずれも左向きである。図像の向きや位置を左右反対にすることは、絵入り百科事典によく見られる現象であり、ここでは特に取り上げない。

第二に、「狒狒」の毛髪である。『訓蒙図彙』❶寛文版本は、長髪の「狒狒」の横向きの姿を描く。『本草綱目』A系統①、B系統②④も同様である。これは『本草綱目』「狒狒」本文が『爾雅』を引いて、

『爾雅』云、狒狒、如人被髪迅走食人。

（『爾雅』に云く、「狒狒、人の被髪して迅く走るが如く、人を食ふ」と。）

とする記述に依拠するものであろう。

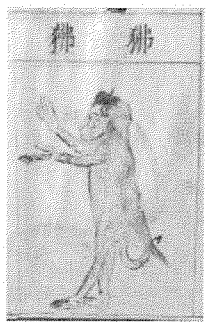
第三に、「狒狒」の表情である。『訓蒙図彙』❶寛文版本、『本草綱目』A系統①、B系統②④はすべて「狒狒」は笑みを浮かべている。

「狒狒」の笑いについては、『本草綱目』本文に『山海経』を引いて、次のように記されている。

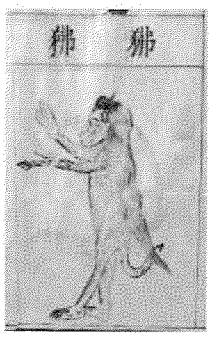
『山海経』云、梟羊、人面、長唇、黒身、有毛、反踵。見人則

図A

図B



図C



図D

笑、笑則上唇掩目。

（『山海経』に云く、「梟羊、人面、長唇にして、黒身、毛有りて反踵なり。人を見れば則ち笑ひ、笑へば則ち上唇は、目を掩ふ。）

また、李時珍の説として、『方輿志』を引いて「人に逢へば、則ち笑ふ」とし、

時珍曰、按『方輿志』云、狒狒、西蜀及処州山中亦有之、呼為人熊。人亦食其掌、剝其皮。閩中沙縣幼山有之、長丈餘、逢人則笑。呼為山大人。或曰野人及山魈也。

（時珍曰く、「按ずるに、『方輿志』に云く、「狒狒、西蜀及び処州山中にも亦た之有り、呼びて「人熊」と為す。人も亦た、其の掌を食ひ、其の皮を剥ぐ。閩中沙縣幼山、之有り、長丈余り。人に逢へば、則ち笑ふ。呼びて「山大人」と為す。或いは曰く、「野人」及び「山魈」なり。）

同じく、李時珍が鄧顯明撰『南康記』を引いて「人を見れば輒ち目を閉じ、口を開きて笑ふが如し」とある。

又鄧顯明『南康記』云、山都、形如昆侖人、通身生毛。見人輒閉目、開口如笑。好在深澗中翻石、覔蟹食之。

（又、鄧顯明の『南康記』に云く、「山都、形ち昆侖人の如く、通身毛を生ず。人を見れば輒ち目を閉じ、口を開きて笑ふが如し。好みて深澗中に在て石を翻して、蟹を覔めて之を食ふ」と。）

『本草綱目』『訓蒙図彙』の「狒狒」の笑みは、これら『本草綱目』の本文を図像化したものであろう。『訓蒙図彙』図A「狒狒」の上唇がきわめて大きく描かれているのは、『本草綱目』所引『山海経』に「笑へば則ち上唇は、目を掩ふ」とある一文を忠実に反映したものとみられる。

第四に、「狒狒」のポーズである。『訓蒙図彙』❶寛文版本は、「狒狒」が山中の岩壁に寄りかかって座している。これに対して、『本草綱目』A系統①、B系統②④はいずれも立ち姿である。

この『訓蒙図彙』❶寛文版本の「狒狒」が岩壁に寄りかかるポーズもまた、『本草綱目』が典拠と考えられる。『本草綱目』「狒狒」の「睡則倚物（睡れば、則ち物に倚る）」という一文に注目したい。

『山海経』云、梟羊、人面、長唇、黒身、有毛、反踵。見人則笑、笑則上唇掩目。郭璞云、交廣及南康郡山中、亦有此物。大者長丈餘、俗呼為山都。宋建武中、獠人進雌雄二頭。帝問土人丁鑾鑾曰、其面似人、紅赤色、毛似獼猴、有尾。能人言、如鳥聲。善知生死、力負千鈞。反踵無膝。睡則倚物。獲人則先笑而後食之。猟人因以竹筒貫臂誘之、俟其笑時、抽手以錐釘其唇著額、候死而取之。髪極長、可為頭髪。血堪染靴及緋、飲之使人見鬼也。帝乃命工図之。

（『山海経』に云く、「梟羊、人面、長唇にして、黒身、毛有りて反踵なり。人を見れば則ち笑ひ、笑へば則ち上唇は、目を掩ふ」と。郭璞云く、「交廣及び南康郡の山中にも、亦た此の物有り。大なるもの、長丈餘り、俗に呼びて『山都』と為す。宋の建武中、獠人、雌雄二頭を進る。帝、土人、丁鑾に問ふ。鑾曰く、「其の面、人に似て紅赤色なり。毛は獼猴に似て、尾有り。人言を能くし、鳥聲の如し。善く生死を知る。力、千鈞を負ふ。反踵し、膝無し。睡れば、則ち物に倚る。人を獲れば、則ち先づ笑ひて而して後に之を食ふ。猟人、因りて竹筒を以て臂を貫き、之を誘ふ。其の笑ふ時を俟ちて、手を抽き、錐を以て其の唇に釘し、額に著く。死するを候ちて之を取る。髪は極て長く、頭髪と為るべし。血は、靴及び緋を染むに堪ふ。之を飲めば、人をして鬼を見［現］しむるなり」と。帝、乃ち工に命じて之を図く。

『訓蒙図彙』❶寛文版本は、この一文に拠って、岩壁に寄りかかる「狒狒」のポーズを描いたのであろう。

以上のことから、『訓蒙図彙』❶寛文版本の図像は、『本草綱目』の図像と本文に密接に依拠しているとみてよいであろう。『訓蒙図彙』❶寛文版本が『本草綱目』の本文を参看引用した可能性が高いことは、すでに別稿でも論証した。[15] それだけでなく、『本草綱目』本文と図像自体が対応している。これを参看した中村惕斎は、より緊密に『本草綱目』本文の考証を『訓蒙図彙』❶寛文版本の図像に反映させたのである。

四、『訓蒙図彙』寛文版本「狒狒」の本文と『本草綱目』

『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の図像は、『本草綱目』の本文と図像を忠実に図像化していた。

また、別稿では『訓蒙図彙』❶寛文版本の本文が、『本草綱目』にみえる異名・梵名、独自異文を摂取していることを指摘し、『訓蒙図彙』❶寛文版本の本文が、『本草綱目』の本文を忠実に引用した可能性を論じた。[16]

『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の本文も、『本草綱目』の本文を引用した可能性が高いことが予測される。ただし、『本草綱目』には、撰者李時珍による詳細な考証が施されている。中村惕斎は『訓蒙図彙』❶寛文版本の撰述にあたって、『本草綱目』本文の考証を、どのように読み解いていたのであろうか。

表1は、『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の本文を『本草綱目』と対照したものである。[17]

表1・『訓蒙図彙』❶寛文版本と『本草綱目』における「狒狒」の異名

『訓蒙図彙』「狒狒」	『本草綱目』「狒狒」
「狒狒」ⓐ又作「䵷－䵷」。	「狒狒」、「䵷䵷〈與「狒」同、亦作「䵷」〉」、
ⓑ一名、梟－羊	梟羊〈『山海経』〉、野人〈『方輿志』〉、人熊。時珍曰、『爾雅』作狒。『説文』作䵷、從昌從凶從内、象形。
ⓒ或曰、山－都亦同。	按、郭璞謂、山都即狒狒、稍似差別、抑名同物異與。

表1から、『訓蒙図彙』❶寛文版本、『本草綱目』の掲出語「狒狒」、および異名ⓐ「䵷䵷」、ⓑ「梟羊」、ⓒ「山都」が共通して確認される。

第一に、『訓蒙図彙』❶寛文版本の掲出語「狒狒」は『本草綱目』と一致する。

第二に、『訓蒙図彙』❶寛文版本が「又作」としてあげる異名ⓐ「䵷䵷」は、『本草綱目』では「䵷」「狒」は同字であり、「䵷」は通行字体とする。李時珍の説として、『爾雅』「狒」をあげ、『説文』「䵷」が「昌」「凶」「内」に従う象形文字とする。

第三に、『訓蒙図彙』❶寛文版本が「一名」としてあげる異名ⓑ「梟羊」の典拠は、『本草綱目』は『山海経』の「梟羊」である。

第四に、『訓蒙図彙』❶寛文版本が「或曰」としてあげる異名ⓒ「山都」について、『本草綱目』は『山海経』郭璞注「俗呼之曰山都」を引く。

『山海経』云、梟羊、人面、長唇、黒身、有毛、反踵。見人則笑、笑則上唇掩目。

郭璞云、交廣及南康郡山中、亦有此物。大者長丈餘、俗呼為山都。

（『山海経』に云く、「梟羊、人面、長唇にして、黒身、毛有りて反踵なり。人を見れば則ち笑ひ、笑へば則ち上唇は、目を掩ふ」と。郭璞云く、「交廣及び南康郡の山中にも、亦た此の物有り。大なるもの、長丈餘り、俗に呼びて『山都』と為す」と。）

ただし、『本草綱目』撰者李時珍は、この「山都」を「狒狒」と見なしうるか否か、疑問を呈している。

按、郭璞謂山都、即狒狒。稍似差別、抑名同物異與。

（按ずるに、郭璞謂ふところの「山都」は、即ち「狒狒」なり。稍や似て差別あり。抑そも名は同じくして、物は異なるか。）

これを参看した『訓蒙図彙』❶寛文版本は、「山都」について次のように記す。

或曰、山都亦同。

（或曰、山都亦た同じ。）

そこで、「或曰」に注目したい。『訓蒙図彙』❶寛文版本「凡例」には、「或曰」について次のように述べている。

其未ルレ審ナラ者ハ、称シテ二或一曰ト一以備二参一閲ニ一矣。

（其の未だ審らかならざる者は「或曰」と称して以て参閲に備ふ。）

『訓蒙図彙』❶寛文版本は、未詳のものを「或曰」と称して参考にあげるというのである。つまり、『訓蒙図彙』❶寛文版本は、『本草綱目』の李時珍の考証を参看し、「山都」を「狒狒」の異名としてよいかどうか、李時珍自

身が迷っていることを認識していた。したがって、未詳のものを備考としてあげる「或曰」という形式で「山都」を引用したのである。

以上のことから、『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の異名は、『本草綱目』にすべて確認された。しかも、李時珍が疑義を呈した異名「山都」を「或曰」と称して「参閲に備ふ」など、『本草綱目』の考証を詳細に読み解き、尊重している姿勢がうかがわれる。『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の本文は、『本草綱目』本文のみならず、李時珍の考証までも忠実に継承していたのである。

むすび

以上、『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の図像と本文について、出典『本草綱目』との関係を検討してきた。『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の図像は、『本草綱目』和刻本B系統の図像をそのまま踏襲するのではなく、本文分析の上で、新たな図像を作り出したのである。具体的には、次の二点が確認されよう。

第一に、『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の図像は、『本草綱目』和刻本「狒狒」の図像の向きを左右反対にし、さらに『本草綱目』の本文に示された「狒狒」の長い毛髪、笑みを浮かべた表情、岩に寄りかかるポーズを、『本草綱目』以上に忠実に図像化したものであった。

第二に、『訓蒙図彙』❶寛文版本「狒狒」の本文は、『本草綱目』和刻本の本文、引用漢籍のみならず、これらを駆使して考証を加えた李時珍の説をきわめて厳格に踏襲し、尊重する姿勢を示している。中村惕斎は、『訓蒙図彙』❶寛文版本の撰述にあたって、「凡例」にあげたとおり、「或曰」の注記を厳格に使用していた。

日本最初の絵入り百科事典『訓蒙図彙』は、「凡例」に「諸家の本草の図説」として不特定の本草書をあげるにとどまる。しかし、「本草の図説」のなかで、最も重要な位置を占めていたのは、李時珍撰『本草綱目』であった。

注

(1) 杉本勲『近世実学史の研究』（吉川弘文館、一九六二年三月）。

(2) 本論文では、『本草綱目』の版本に①②③④という記号を使うため、便宜上『訓蒙図彙』の版本を❶❷❸という記号を使い、区別をつける。

(3) 『訓蒙図彙』寛文版本の引用は国会国立図書館蔵（一一七―一八）、寛文六年（一六六六）・山形屋版本に拠る。旧字体を常用漢字に直した。

(4) 杉本つとむ「解説」（『訓蒙図彙』早稲田大学出版部、一九七五年七月）。勝又基「絵入り百科事典の工夫―『訓蒙図彙』と『和漢三才図会』」（『教養の浸透―江戸の出版文化という回路』勉誠出版、二〇一三年十一月）。

(5) 勝又基「『訓蒙図彙』解題」（『江戸時代図説百科　訓蒙図彙の世界』、大空社、二〇〇二年十二月）。

(6) 海野一隆「江戸時代刊行の東洋系民族図譜の嚆矢」（『日本古書通信』第八九六号、二〇〇四年三月）。

(7) 木村陽二郎「中村惕斎の訓蒙図彙について」（『教養学科紀要』第五巻、一九七三年三月）。勝又基「江戸の百科事典を読む―『訓蒙図彙』の変遷」（『月刊しにか』第十一巻、第三号、二〇〇三年三月）。なお、小林祥次郎氏『江戸のイラスト辞典　訓蒙図彙』（勉誠出版、二一〇二年十月）によれば、寛文八年（一六六八）刊、寛文六年版本を縮刷した再版『新刻訓蒙図彙』二〇巻等がある。

(8) 渡邊幸三「李時珍の本草綱目とその版本」（『東洋史研究』第十二巻第四号、一九五三年六月、東洋史研究会）。岡西為人『本草概説』（創元社、一九七七年十二月）。

(9) 杉本つとむ『日本本草学の世界』（八坂書房、二〇一一年九月）。

(10) 注（8）の渡邊論文。

(11) 注（8）の渡邊論文。

(12) 拙稿「『訓蒙図彙』寛文版本と『本草綱目』承応・万治系統版本―図像の分析から―」（『語学教育研究論叢』第三六号、二〇一九年三月）。

(13) 注（12）の拙稿。

(14) 使用本文は次のとおりである。
国会国立図書館所蔵・『本草綱目』承応二年版本〈特一―八六二〉。
国会国立図書館所蔵・『本草綱目』寛文九年版本〈特一―八九五〉。

(15) 拙稿「『訓蒙図彙』と『本草綱目』―寛文版本の成立をめぐって―」(『外国語学会誌』第四八号、二〇一九年三月)。

(16) 注(15)の拙稿。

(17) 『本草綱目』の本文の引用は、国会国立図書館所蔵・『本草綱目』寛永十四年版本〈特一―三〇二四〉に拠る。紙幅の関係上、訓点を略す。なお、注(8)の渡邊論文によれば、寛永十四年版本の訓点には誤読が多い。そのため、その訓点に従わず、私に訓読文を付けた。